

登場人物

伊織 勇樹 (いおり ゆうき)

男。大学一年生。陸上部。

平常時 6.8cm、勃起時 16.9cm の仮性包茎チンポ。童貞。

「結満さま」によって理不尽なスケベに巻き込まれる。

安藤 豪平 (あんどう ごうへい)

男。42 歳。陸上部監督。

勇樹の潜在能力の高さに期待し、目をかけている。

八神 宗吾 (やがみ そうご)

男。大学三年生。陸上部。

勇樹を目障りだと感じている。

三村 嘉平 (みむら かへい)

男。大学四年生。陸上部部長。

最近の宗吾の言動を問題視している。

平常時 8.6cm、勃起時 22.6cm のずる剥けチンポ。

結満さま (けつまんさま)

勇樹のメッセージアプリに一方向的にメッセージを送り付ける謎の存在。

結満さまの言う通りにしないと、理不尽なスケベが過熱する。

第一話

陸上の強豪校であるこの体育大学では、陸上部といえば男子大学生の華とも呼べる存在である。

卒業生たちはプロアスリートとなってCMに出ることも多く、陸上選手のブランドとして周知されているといっても過言ではない。

そんな陸上部のトラック走の中で先頭を走っているのが勇樹だ。

高校生時代に全国大会で何度も一位を獲得し、この体育大学に陸上特待生として入学した勇樹は、メキメキと実力を伸ばし、夏の大会には一年生ながら出場選手に選抜されている。

陸上競技を知らぬ者も勇樹の走りは何か違うと感じさせるものがある。

勇樹はフォームが精確なだけでなく、その筋肉も陸上競技に最適化されつつあると言っても過言ではない。

ランニングパンツから覗く足は長く、力強さを感じさせる動きを見せている。

上半身も決して貧弱ではなく、振り続ける腕を支える肩の強靭さなどが見て取れる。

だが、勇樹が注目を集めるのはそれだけではない。

顔が良いのだ。

爽やか系と評するのが相応しいその顔は、男性性特有の臭みやいやらしさを感じさせず、セックスを連想させる要素がまったく見られないのだ。

そうした清廉な爽やかさは、学内はおろか、学外にも人気を集めており、タウン紙からの取材を受けたこともあるのだ。

とはいえ、勇樹は立派な男である。

ランニングパンツには勇樹のチンポの存在を示すもっこりが盛り上がっており、足を動かすたびにもっこりが右に左にと移動している。

「ラスト一周！」

安藤監督の激に応えるかのように勇樹は速度を上げる。

勇樹は陸上競技が好きである。

走っている間は無心になれるし、走り終えたあとの心地よい疲労感が堪らないのだ。

勇樹は疾走する。

より速く駆け抜けるために、日々の練習でも全力を投入する。

そうして、勇樹たちはトラック走を完走した。

走り終えた勇樹は膝に手をつけて、はあはあと荒く呼吸を繰り返す。

マネージャーが駆け寄り、先頭で走り終えた勇樹から順番にタオルを手渡していく。

「ありがとう……」

勇樹はマネージャーに礼を述べると、タオルで顔を拭き始めた。

顔の汗を拭い終えた勇樹は、タオルを肩にかけ、額に張り付いた前髪を後頭部に向かって撫でつける。

そうした仕草の一つ一つが嫌味にならない清廉なイケメンぶりに陸上部の練習を見学している女子学生たちは顔を赤らめる。

けれど、誰もスマートフォンを手に持たない。

陸上部の練習は撮影厳禁なのだ。

一時期、ランニングパンツの中で左右に揺れるもっこりへの熱がネットで加熱し、この体育大学でもそうした盗撮被害が出たのだ。

今の陸上部部長である三村部長もそうしたもっこり盗撮で嫌な思いをしたと勇樹は聞いている。

ノンケである勇樹には、ランニングパンツの中で揺れるもっこりを求める者たちの気持ちには共感できない。

陸上競技に生涯を捧げる決心をしている勇樹にとって、ランニングシャツとランニングパンツは真剣勝負のための装束であり、卑猥な目を向けられたくないのだ。

「タイムが上がっているじゃないか、勇樹」

「ありがとうございます、安藤監督」

この陸上部の監督を十年近く勤めている安藤監督に褒められ、勇樹は胸が高まった。

安藤監督はこの体育大学のOBであり、この国の陸上競技界に一時代を築いた有名人でもある。

監督となってからも、成績は優秀であり、この活躍が続くのなら陸上競技界のレジェンドと呼ばれるようになるのも時間の問題だと、多くの陸上競技関係者が確信している。

刈り整えられた髭に相応しいダンディズム溢れる顔立ちはまさに雄と呼ぶべきエロスを体現しており、未だに独身であることが学内でも不思議に思われているのだ。

「だが、油断は禁物だ。

アスリートになによりも必要なのは、ベストコンディションで大会に出場することだ。

油断せずに体調管理に励めよ」

安藤監督が勇樹の尻を大きな手でピシヤリと叩いた。

この陸上部ではいつものことである。

勇樹もまた、いつものこととして意識することはなかった。

だが……

ギュウウウウウン！

「あううう！」

勇樹の口から卑猥な声が漏れた。

勇樹の下腹部が精通したばかりの中学生のように切なく悶え始めたのだ。

まさか……！

勇樹の脳裏に昨日の朝のことが思い出された。

目を覚ました勇樹はボクサーパンツ一枚でベッドから降りた。

ボクサーパンツは朝勃ちに合わせて盛り上がり、その頂点から半分ほどがしっとりと濡れている。

「ほんと、男が濡れやすくてどうするんだよなあ」

毎朝のこととはいえ、勇樹はぼやきながらボクサーパンツを脱ぐ。

ぶるるん！

勇樹の仮性包茎チンポが露わになった。

平均よりやや大きな仮性包茎チンポは亀頭の半分ほどが剥けている。

そして、勇樹の鈴口からは我慢汁がぬちょぬちょと流れており、亀頭全体に卑猥な艶を添えている。

勇樹は、我慢汁が出やすい体質なのだ。

勃起しているだけで我慢汁がぬちょぬちょと流れ出て、包皮の間に溜まり、そこからも溢れるほどなのだ。

だから、毎朝毎朝、勇樹は我慢汁で前が濡れたボクサーパンツを着替えないといけない。

高校時代の修学旅行ではこのことをからかわれ、勇樹は他の男はこんなに濡れやすくないのだと知った。

それ以来、勇樹は濡れやすい己のチンポを恥ずかしく思うようになった。

部屋に常備しているウェットティッシュで我慢汁を拭いた勇樹は、全裸でベッドに座った。

朝勃ちが収まるまで我慢汁が出続けるので、萎えてから洗い立てのボクサーパンツを穿くしかないのだ。

それまでの時間つぶしとして勇樹は枕元に置いていたスマートフォンを弄る。

とはいえ、ゲームアプリなどを入れていない勇樹はメッセージアプリを眺めるだけだ。

友人たちからの連絡に返事をしながらスクロールを続けた勇樹はそのメッセージに気がついた。

結満さま。

ゆいまんさま、だろうか。

心当たりのないアカウント名だったので勇樹はブロックするためにその名前をタップする。

仕様上仕方がないことなのだが、結満さまからのメッセージが表示された。

結満さまの言う通り。

勇樹くんは今日、チンポを丸出して大学に行きなさい。

さもないと、尻を叩かれると射精するようになります。

……なんだこれ？

勇樹は白けた。

スパムメッセージの類はブロックしてもブロックしても届くのだが、結満さまからのメッセージはスパムメッセージ特有の文体から離れており、なんというか、不気味だったのだ。「気味が悪いな」

勇樹はそのメッセージを運営に報告したうえでブロックする。

チンポを丸出して大学に行けとか、尻を叩かれると射精するようになる、とかこの文章を考えた奴はエロ漫画の読み過ぎに違いない。

それにアカウント名に「さま」をつけるとか承認欲求丸出しのネット依存者のようで気持

ちが悪い。

とはいえ、この情報化社会ではスパムメッセージはアカウントを保有する限り勝手に送り込まれる。

いちいち、気にしては時間の無駄だということは勇樹も分かっている。

だから、勇樹は朝勃ちが萎え、ボクサーパンツを穿くころには結満さまのことをすっかり忘れていたのだ。

尻を叩かれると射精するようになります。

嘘だろ！

勇樹の心は激しく動揺している。

結満さま、なんてふざけたスパムメッセージが現実になるはずがない。

だが、勇樹の下腹部では精通したばかりの中学生のような切なさや抗いがたい射精欲の嵐が吹き荒れている。

勇樹のランニングパンツの中で勇樹のチンポが勃起し始める。

あっという間に勃起した勇樹のチンポによってランニングパンツが盛り上がる。

「うううううううううう」

勇樹は歯を食いしばって射精欲を耐えようとする。

けれど、嵐のように激しい射精欲によって金玉と前立腺が活発に活動し、精子が活発に動き回るザーメンをぶっ放そうとしている。

「おいおい、どうしたんだ、勇樹？」

安藤監督が前屈みになって呻きだした勇樹に心配そうに声をかける。

他の陸上部員たちも勇樹を囲み、様子を窺っている。

勇樹は陸上部員たちに、そして、陸上部の練習を見学している女子学生たちに勃起を悟られたくないと思い、ランニングパンツのもっこりを両手で覆う。

ランニングパンツ越しに、勇樹は濡れやすい己のチンポから溢れ出ている我慢汁に触れた気がした。

射精を止めることは不可能だ。

勇樹はそう判断した。

前立腺からザーメンが尿道に送り込まれた感覚がするのだ。

だが、皆の前で、それも神聖な練習場所であるグラウンドで射精をするなんて耐えられない。

「す、すいません。

ト、トイレ行きます！」

勇樹は勃起を両手で隠しながら早足でグラウンドに併設されているトイレに向かう。

普段ならば意識することもない距離なのだが、射精が間近に控えた今では致命的な距離だ。

一步一步があまりに小さく、トイレは遥か彼方だ。

勇樹の手の中でランニングパンツのもっこりが我慢汁に濡れてじゅくじゅくとしていく。

陸上部員がグラウンドでザーメンぶっ放したとか、スキャンダルじゃん……」
周囲を囲む陸上部員たちの困惑と嫌悪の言葉に、勇樹は顔を上げることもできない。
「担架を持ってくるんだ」
安藤監督が陸上部員たちに声をかけた。
「貧血で倒れたことにして、クラブハウスまで運び、そこで着替えさせよう。
勇樹がなんでザーメンをぶっ放したかは分からないが、わざわざ喧伝することではない」
ザーメンをぶっ放した余韻で震え続けている勇樹は、安藤監督の配慮に感謝した。
その一方で勇樹は己の身体に起こった変化に恐怖する。
考えられる原因は昨日届いたスパムメッセージ、「結満さま」だ。
だが、あんなスパムメッセージのせいで身体がこんなことになるなんて、常識では考えられない。
訳が分からない……
勇樹は射精の余韻に震えながら、己が何に巻き込まれたのかも分からず、不安に沈むしかなかった。

奥付

『結満さまの言う通り 伊織勇樹の巻』より「第一話」

初出：2023年7月26日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep